て蝗を退治することの方が肝心なのは、もとより言うまでもない。ところが、これらの祭りが考え出され行われるようになると、反ってその大切な作業が忽かにされていくことに注意しなくてはならない。殊に甚しいのは儒教の影響であって、蝗の発生原因を為政者に求めた結果、為政者さえ正しくありさえすれば、直接蝗に手を下す必要などないという極めて消極的な論まで出てくる始末であった。ともかくこうした弊害は唐を界として少なくなり、代ってより実質的な蝗退治が推進されるようになる。しかし、それでもなお蝗の祭りが続行されていたことには、いささかの遣瀬無さを感ずるものである。

## 加賀掾と談義本

### ——天理本『熊野権現開帳』の位置——

沙加戸　弘

古浄瑠璃『熊野権現開帳』は、現在二本が知られている。一本は天理図書館の蔵本であり、もう一本は東大霞亭文庫所蔵にかかり、『熊野権現開帳付平太郎きすい物語』の内題を持つ。

この天理本と東大本は、従来同一の正本であると考えられてきた。共に著名な三十三間堂棟由来を中心とする平太郎の仇討・出家・熊野参詣の物語で、同じ内容、酷似した挿絵、よく似た文章と、同一正本と考えられるだけの条件は揃っている。が、詳細に比較検討すると、別の正本であることが判明する。

では、この天理本『熊野権現開帳』は、どういう正本であるかを考えるに、原題僉もなく、はじめ三丁、おわり二丁程度が欠けているため、手がかりは本文だけということになる。そこで、四段目にある道行を手がかりにすると、この道行は、延宝・天和・貞享期に活躍した浄瑠璃太夫、宇治加賀掾の段物集『大竹集』等に収められている「平太郎道行」と一致する。したがって天理本『熊野権現開帳』は、加賀掾正本であると判断してよいと思われる。

この加賀掾の『熊野権現開帳』と東大本『熊野権現開帳』との間に深い関係が存在することは述べたとおりであるが、東大本の太夫名、刊年等は残念ながら今のところ明らかにすることができない。

しかしながら、加賀掾の『熊野権現開帳』が確認できたことにより、加賀掾には興味ある三種の真宗関係浄瑠璃が揃うことになる。一つは、近年大英博物館本が古典文庫より刊行された『他力本願記』、もう一つは今の『熊野権現開帳』、今一つは、同朋大学の織田顕信氏が、『同朋仏教』第六・七合併号に翻刻紹介された天理図書館所蔵の『源海上人』である。

では、なぜこの三種の浄瑠璃が問題となるかという点について、次に述べてみたい。これらは、いずれも延宝初年から天和初年にかけて刊行された浄瑠璃である。まず、『他力本願記』は、非常に巧妙にカムフラージュされてはいるが、親鸞の伝記であることはまちがいのないところである。このカムフラージュは、寛文十二年十一月に、浄瑠璃出版界に対し、東本願寺からきびしい指弾

があったため、それを脱れる方策であったと考えられる。次に『熊野権現開帳』は、前述したとおり、平太郎すなわち真仏の物語であり、『源海上人』はその名の通り源海の伝記である。要するに、親鸞・真仏・源海の三人の伝記浄瑠璃を、加賀掾が語ったということになるわけである。また、これ以外の真宗関係浄瑠璃は、今のところ加賀掾に見出すことができない。

では、この親鸞・真仏・源海の三人がとりあげられたことが、なぜ問題になるのか、ということであるが、これはもう周知の如く、この三人をまとめてとりあげることは、早くから真宗の談義本で行なわれていたのである。すなわち、『親鸞聖人御因縁』がそれである。今も中世中期の写本が何部か残っている。内容は三段に大きく分けられ、親鸞・真仏・源海の事蹟が述べられている。親鸞については、親鸞が六角堂救世菩薩の夢告により、月輪関白兼実の娘玉日を妻ったという説話、平太郎真仏については、平太郎が不浄を厭わず熊野権現に参詣し、権現が念仏の声を聞くのはうれしいと平太郎を礼拝したという説話、源海についてはほぼ一代記が、それぞれおさめられている。親鸞・真仏・源海と、順を追って内容・分量が豊富になっている。

加賀掾の三作、『他力本願記』、『熊野権現開帳』、『源海上人』は、おそらく、この談義本に影響を受けたものと考えられる。『他力本願記』では、前述したように、かなり強くカムフラージュされているが、前半三段目までが『親鸞聖人御因縁』の玉日との結婚説話の翻案と考えられる。次に『熊野権現開帳』は、三十三間堂棟由来に平太郎の熊野参詣をとり合せたものであり、やはり、『親鸞聖人御因縁』の平太郎熊野参詣の影響下にあると考えてよいかと思われる。三作めの『源海上人』であるが、これはまちがいなく、『親鸞聖人御因縁』の影響下に成立したと認めることができる。主要登場人物の名前、および展開の大筋の一致は明らかである。

以上のように、加賀掾の三作、『他力本願記』、『熊野権現開帳』、『源海上人』は、談義本『親鸞聖人御因縁』と影響関係がある。

次にもう一点、加賀掾の三作と『親鸞聖人御因縁』との影響関係をふまえた上で、考えておかねばならないことがある。それは、『親鸞聖人御因縁』がどういう性格の談義本であり、この影響関係は何を意味しているかという点である。『親鸞聖人御因縁』については已に、荒木門徒の正統性を主張する談義本であると日下無倫・宮崎円遵両先学が明らかにしておられる。近世中期である故、荒木門徒は仏光寺教団と考えてさしつかえはないと思われるが、このような談義本の影響下に、加賀掾の浄瑠璃三作は作られたのである。さらに、親鸞あるいは平太郎真仏に関するものだけならば、浄瑠璃における先行作品も数多くあり、また一般的であることから市場性にも富んでいたと考えられ、上演も首肯できるが、源海というような、仏光寺教団以外ではほとんど知られず、浄瑠璃上演に際してもメリットは非常に小さかったであろうと思えるものまで上演している点、また、談義本が多くの場合秘書とされていたにもかかわらず、加賀掾の浄瑠璃、特に『源海上人』では高い密着度を保っている点などを考え合わせる時、加賀掾の

三作上演に内部的必然性を想定することは、さほど飛躍した考え方ではないと思える。どれほどひかえ目に見つもっても、親鸞・真仏・源海の三人の伝記浄瑠璃を加賀掾が上演したこと、それが『親鸞聖人御因縁』と同じ組合せになっていること、加賀掾にそれ以外の真宗関係浄瑠璃がないという三つの事実だけは、偶然と考えるわけにいかないのである。

つまり、加賀掾は仏光寺教団と、何らかのつながりがあったのではないかと推定されるのである。そこには、大阪において、親鸞伝浄瑠璃を上演して、東本願寺からきびしい弾圧を受けた出羽掾・播磨掾らを尻目に、京都にありながら、当時東本願寺と敵対していた仏光寺とつながって、東本願寺に対しては巧みにカムフラージュしながら、仏光寺の高僧伝を上演した加賀掾、という構図が、ぼんやりながらうかんでくるように思えるのである。

昭和五十一年度

## 特別研究生研究発表要旨

# 浄土教における罪悪観について

秦　治人

人間に於ける罪悪の問題には様々な側面からの把え方があるが、ここでは仏教、特に浄土教的罪悪観について考えてみたい。

仏教の基本的立場には、縁起観や業思想があり、その宗教的実践は「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」の七仏通戒偈や、戒定慧の三学の実践として説かれていく如くである。仏教では人間の行為（業）を身口意の三業から把え、善・不善の行為の基本になるものが十善業・十悪業（十不善業）である。なかでも貪欲・瞋恚・迷妄（癡）は三不善根、すなわち悪の根源的なものとして三毒の煩悩とも呼ばれるものである。

また悪の行為は罪業とも呼ばれ、両者は必ずしも明確に区別されないものである。いわゆる罪悪と言われる如く悪なる行為は罪とみなされるのである。

では浄土教に説かれる罪悪とはどのようなものであろうか。周知の如く『大経』の三毒・五悪段や『観経』序分や下品には、人間業行の悪業と苦悩する様が具体的に、しかも仏の悲歎として説かれている通りである。人間罪悪業の事実と仏の悲歎こそ、多く